

提出日 2020 年 1 月 20 日

2020 年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ

「琉球家譜からみる近世泊士の位階と昇進について」

氏名 : 新田和馬

所属学部学科 : 経法商学部経法商学科

I. 初めに

沖縄に住む人々が「泊^{とまり}」という言葉を知ると、何を思い浮かべるだろうか。多くの人が那覇市の一地域である「那覇市泊^{なはしとまり}」を思い浮かべるかもしれない。だが、沖縄がかつて琉球王国であった頃は、「那覇」とは異なる別の地域として「泊村」が存在していた。その後、1879年に起きた「琉球処分」で琉球王国が沖縄県となったことで、泊村は1年後に那覇へ編入され、現在の私たちが知る「那覇市泊」となったのである。

泊村は、現在の字泊^{あぎ}及び前島地域に所在した。その名称に、港を意味する「泊」が使用されていることや、尚徳王の鬼界島遠征に利用されたこと¹等から、琉球では比較的使用されていた港と考えられる。また、泊村には公館と公倉が置かれ、離島各地からの貢物がそこで管理されていた。²さらに、泊村には硫黄倉が置かれ、琉球王国の主要な輸出品である硫黄も管理されていた³。

他方で、外交貿易の発展により那覇港が整備されると、那覇港は琉球を代表する港となり、泊港の機能は那覇港に移ったとされている。泊港は、奄美諸島や宮古・八重山諸島等との交易を担う「国内交易港」を主な役割としていた。だが、近世琉球になると、薩摩藩の琉球侵攻によって奄美諸島が薩摩藩に割譲されたことで公館は廃止され、国内の離島の貢物については各役座に分掌された⁴。しかし、近世琉球における泊村の役割はそれだけでなく、外国から漂着してきた漂流民らを収容する役割や、琉球に訪れてきた外国人らを収容する「外国人漂着民収容センター」としての役割も果たしていた⁵。また、泊村は琉球国内でも4つの町方（首里三平等・那覇四町・久米村・泊村）の1つとされ、他の町方と同様に士族と百姓の両方が居住していた。そのうち、士族らは家譜の所有を認められていた。

琉球家譜とは、康熙28年（1689）に首里王府が家臣らに対して編集・提出を命じたことによって開始され、王国が滅亡する1879年まで書き継がれていた⁶。現存する家譜は全て漢文で書かれており（口上覚等の王府への申請文書は和文の草書体）⁷、各家の系譜や役職、

¹ 呉姓家譜大宗我那覇家の1世宗重の記録には、尚徳王が喜界島遠征から帰港した際に、泊港で群臣男女が出迎えたとある。（那覇市史編集委員会『那覇市史家譜資料（四）那覇・泊系』那覇市企画部市史編集室、1983年、175頁。）

² 『球陽』21項には、「（前略）東北諸島入貢の後、王輔臣に命じて公館を泊村に建てしめ、官吏を置いて諸島の事を治めしむ。即ち今の泊御殿是れなり。又公倉を泊御殿の北に建て、諸島の貢物を収貯せしむ。（後略）」とあり、英祖王代から公館・公倉が存在していたことがわかる。（球陽研究會『沖縄文化史料集成5球陽読み下し編』角川書店、1974年、102頁。）

³ 角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典（47）沖縄県』1986年、502-503頁。

⁴ 嘉手納宗徳「泊御殿」沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』中巻、沖縄タイムス社、1983年、958頁。

⁵ 渡辺美季「近世琉球における外国人漂着民収容センターとしての泊村」第4回沖縄国際シンポジウム実行委員会、2003年。

⁶ 田名真之「琉球家譜の成立と門中」『系図が語る世界史』青木書店、2002年、91-92頁。

⁷ 田名真之「琉球家譜の成立とその意義」『沖縄史料編集所紀要』（4）1-32、1979年、

位階等が記されている。また、その記録は系図座で承認を得た公的な文書⁸であることから、歴史的価値の高い資料とされている。

本研究では、本島系家譜（首里・那覇・久米・泊系）のうち、『那覇市史家譜資料（四）那覇・泊系』に収録されている泊系家譜 20 冊を中心に、また首里・那覇系の情報を比較対象としながら泊士の実態に迫っていきたい。

II. 研究の目的、動機

本研究の動機は、琉球において4つの町方の1つである「泊村」という地域が、琉球王国時代にどのような役割を担っていたのか、または担わされていたのかを調査しなければ、琉球王国の実体は判然としないと感じたためである。現在、泊村についての研究は管見の限りあまりみられず、そのうえ関係資料が散逸している。泊村は琉球国内で重要な位置を占めていると思われることから、当該地域についての研究が空白になると、琉球史はもちろん、関連する離島各地の研究においても欠落が生じてしまう。その空白を補うためにも、本研究では泊村の歴史に焦点を当てたいと考える。

本研究では、泊村研究の足掛かりとして現存する泊系家譜の分析を行い、そこに記されている「泊士」らの位階と昇進を見出すことで、今後の泊村研究に役立てたいと考える。

III. 研究方法、地域、期間

(1) 研究方法

史料及び参考文献の収集、その閲覧と分析

(2) 期間

5月～10月 参考文献の収集と閲覧

11月～1月 分析と執筆

IV. 結果

『那覇市史家譜資料（四）那覇・泊系』に収録されている20冊の泊系家譜についての分析を行なったところ、近世琉球における一般的な泊士が叙せられる最後の位階は、ほとんどが黄冠（筑登之親雲上）であり、たとえそこから昇進したとしても「座敷」の位階に叙せられることが限界であることが判明した。また、一般的な泊士が勤めることのない特異な役職に就いて成果を上げることができれば、座敷より1段上の申口座に昇進するが、筋目の変更は難しいと考えられる。

14 頁。

⁸ 家譜を取り扱う「御系図奉行」が置かれると、家譜は2部作成され、系図座と各家でそれぞれ保管されていた。また、王府が御朱印（首里之印）を押し、公的性格を持たせた。前掲注7参照、8-9頁。

V. 考察、分析

近世における泊士については、親方に昇進できた者はおらず、全て親雲上程度にとどまっている⁹。実際に、『那覇市史家譜資料（四）那覇・泊系』のうち、泊系に分類されている20冊の家譜を調査したところ、親方まで陞った人物は確認できなかった。このことから、近世琉球における泊士の位階昇進は、親雲上程度にとどまっているということがわかる。

また、筋目についても里之子筋目は1人としておらず、管見の限り全ての泊士が筑登之筋目である。これは、首里の里之子筋目895家、那覇の里之子筋目が9家¹⁰であることを考えると、泊士は筋目において首里士と圧倒的な差がある。また、那覇士と比較した場合は、ほとんどが筑登之筋目という点では共通しているものの、泊士には里之子筋目がないことを考えると、両者は筋目において差があるといえる。

さらに、泊士の位階について表1を作成したところ、一般的な泊士が叙せられる位階は、黄冠（筑登之親雲上）の位階が限界であり、たとえそこから昇進した場合でも座敷の位階に叙せられることが限界であることが判明した。座敷以上の昇進については、松姓家譜（仲地家）の譜代二世紀昌の他にはみられない。

表1 泊士らが叙せられた位階の表¹¹

（『那覇市史家譜資料（四）那覇・泊系』の泊系20冊をもとに作成）

家譜名	不明を除いた人数	筑登之座敷	黄冠 （筑登之親雲上）	勢頭座敷	座敷	申口座
咸姓家譜 外間家	22人	3人	15人	2人	2人	0人
咸姓家譜 外間家 （支流）	29人	18人	10人	0人	1人	0人
新参姜姓家譜 金城家	11人	4人	7人	0人	0人	0人
新参姜姓家譜 金城家	12人	7人	3人	1人	1人	0人

⁹ 田名真之「首里・那覇・泊系家譜について」『沖縄近世史の諸相』ひるぎ社、1992年、209-210頁。

¹⁰ 前掲注9参照、210頁。

¹¹ 位階について記載のなかった人物は「不明」とした。それらの人物の位階は、おそらく「子」または「仁屋」と考えられる。また、家譜の記録中で人物名の下に記される呼称（1世〇〇 □□親雲上等）については、記入されている場合とそうでない場合があることや、特殊な場合（1世康長 摩文仁掟親雲上等）があるため対象外とした。

(支流)						
幸姓家譜 嶺井家 (支流)	8 人	4 人	3 人	1 人	0 人	0 人
新參松姓家譜 金城家	6 人	0 人	2 人	1 人	3 人	0 人
松姓家譜 仲地家 (支流)	19 人	3 人	6 人	3 人	6 人	1 人
詹姓家譜 平敷家 (支流)	11 人	4 人	4 人	1 人	2 人	0 人
明姓家譜 嘉陽家 (支流)	5 人	0 人	人	2 人	1 人	0 人
明姓家譜 幸地家 (支流)	22 人	12 人	2 人	2 人	1 人	0 人
容姓家譜 眞榮田家 (支流)	32 人	9 人	17 人	4 人	2 人	0 人
容姓家譜 山田家 (支流)	30 人	8 人	16 人	5 人	1 人	0 人
容姓家譜 山田家 (支流)	17 人	5 人	7 人	1 人	4 人	0 人
葉姓家譜 名渡山家 (支流)	25 人	5 人	15 人	1 人	4 人	0 人
雍姓家譜 具志堅家 (支流)	10 人	2 人	4 人	1 人	3 人	0 人
雍姓家譜 伊波家 (支流)	11 人	1 人	8 人	1 人	1 人	0 人

柳姓家譜 系洸家	17人	5人	5人	2人	5人	0人
柳姓家譜 浦崎家 (支流)	18人	7人	8人	2人	1人	0人
柳姓家譜 田仲家 (支流)	44人	14人	23人	4人	3人	0人
柳姓家譜 又吉家 (支流)	7人	1人	5人	0人	1人	0人
合計	356人	112人	167人	34人	42人	1人

例外である紀昌は、医業の功績によって道光3年(1823)に豊見城間切長嶺の名島を賜り、同7年(1827)に申口座位に叙せられたことで新参から譜代士籍への昇格を果たしている¹²。彼の筋目である筑登之筋目は、申口座の次に親方へと昇進するため、彼が泊士の中で親方に近く、位階において出世した存在であることは明らかである。

この事例は、通常の泊士が勤めることのない医者という「特異な役職」によって昇進できた稀有な事例である。一般的な泊士の昇進は座敷の位が限界という推測を加味すると、泊士は特異な役職に就かない限り、座敷以上の位階に昇進できないということが確認できる。これらのことから、一般的な泊士の位階昇進は難しいということが窺える。

VI. 今後の展望

今後の展望として、本研究で述べることのできなかつた分析結果を卒業論文等で執筆したい。また、それらの研究を通して、泊村の実体を明らかにしていきたい。

VII. 終わりに

本研究を支援して頂いた「琉球弧研究支援」の名称にも使用されている「琉球弧」という地域は、琉球や薩摩を主軸として大きく力関係が揺れ動いた地域でもある。泊村は西南諸島と密接に結びついており、その盛衰はまさに「琉球弧の歴史」を反映している。荒波の時代に生きた人々の歴史は、現代においても苦悩する沖繩人にも通じるものがある。厳しい環境に置かれながらも逞しく生きる人々の歴史を知るとは、私たち沖繩人、ひいては日本全体の「明日への推進力」の一部になることだろう。その第一歩となる調査を琉球弧研究支援で行えたことを嬉しく思う。

¹²那覇市史編集委員会『那覇市史家譜資料(四) 那覇・泊系』那覇市企画部市史編集室、1983年、641頁。

VIII. 参考文献、調査協力

〈史料〉

那覇市史編集委員会『那覇市史家譜資料（四）那覇・泊系』那覇市企画部市史編集室、1983年。

球陽研究会『沖縄文化史料集成 5 球陽読み下し編』角川書店、1974年。

〈参考文献〉

とまり会編『泊誌』とまり会、1974年。

前田義見「泊村」沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』中巻、沖縄タイムス社、1983年。

嘉手納宗徳「泊御殿」沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』中巻、沖縄タイムス社、1983年。

角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典（47）沖縄県』1986年。

渡辺美季「近世琉球における外国人漂着民センターとしての泊村」『沖縄研究国際シンポジウム第4回（沖縄・ヨーロッパ大会）』第4回沖縄研究国際シンポジウム実行委員会、2003年。

田名真之「琉球家譜の成立と門中」『系図が語る世界史』青木書店、2002年。

田名真之「琉球家譜の成立とその意義」『沖縄史料編集所紀要』（4）、沖縄県沖縄史料編集所、1979年。

〈調査協力〉

前田舟子（沖縄大学経法商学部准教授）

IX. 指導教員コメント

現在の那覇市泊といえば、「とまりん」に代表されるように「港のある地域」というイメージだろうか。とはいえ、海外からやってくる大型客船などは那覇港に着岸し、県内を往来する離島便は泊港に停泊する、という役割分担が今も見取れる。それは琉球王国時代を彷彿とさせるもので、その意味では、かつての泊は確かに王国の重要な拠点として存在していたのだが、首里や那覇に比べるとどうしても影が薄くなってしまいうらいがある。しかし、そうしたイメージを打破しようと意欲的に取り組んだのが、今回の新田さんの研究である。

昨年度の琉球弧研究で、新田さんは自身のルーツである呉姓家譜を紐解くことができた。そこから今度は、呉氏が泊村を拠点としていたことに着目するようになり、今回の泊土研究に至ったようである。

それでも、泊村に関する研究はあるようであまりないというのが現状であり、限られた史料を収集しようにもコロナ禍の影響で思うように研究が進まなかったのが、今回の研究は非常に苦しかったと思う。それでもどうにか泊系家譜に焦点を絞って、家譜の中から泊土族

たちの履歴を拾い集め、彼らの昇進やそれに伴う家柄などの傾向を分析できたことは評価したい。本報告書では字数制限のため、研究のすべてを出し切ることができなかったようだが、卒論に引き継ぐようなので、そちらを期待したい。それでもあえて欲を言えば、今後は次の点についても検討して欲しい。

たとえば、なぜ泊系士族には「筑登之筋目」が多く、あまり「里之子筋目」がいなかったのか。琉球士族には2種の筋目があり、里之子筋目の方が上だと一般には言われているが、筋目は家格の系統のようものなので、それを変更すること自体稀なのだが、中には功績によって筋目変更が許可される場合もあった。泊士たちが筑登之筋目という宿命をどのように受け入れていたのか。筋目を変更した者について分析すれば、泊士が泊士であることをどのように捉えていたのかが分かるような気がした。そのためにも、泊系家譜にある「覚」（王府への申請書）について徹底的に分析して欲しい。

また、羽地朝秀の改革において、もともと士族として認められていた「譜代」と、後から申請して士族になった「新参」とがいたが、泊士の中には新参から逆に譜代になった者もいた。それはなぜなのか。そこから泊士による伝統士族へのこだわりが垣間見えるように思う。

最期に、現存する泊系家譜を見る限りでは医者はいなかったようだが、しかし王府側の記録を読んでいると、王府御用達の医者である首里医者に対し、泊には町医者という庶民のための医者が多く存在していたように見える。今でも、泊といえば医院が多い町で、医者を多く輩出した地域というイメージがある。なので、もしかすると、士族としての医者は少ないが、町百姓も泊には多かったので、百姓が医者を担っていたのかも知れない。従って、泊村の全体像を把握するためには、泊士だけでなく、泊に住む百姓たちのことも調べなければならない。そのため、今後はもっと広くあらゆる視点から泊村についてアプローチするような研究を行なって欲しい。そうすれば、首里・那覇を中心とした従来の琉球史ではなく、新たな琉球史研究になるのではないかと期待している。